

子どもの人間関係の育ちと教師の関わり方についての一考察

—入園当初の3歳児を中心に—

高月教恵¹⁾*・松岡知子²⁾

1) 幼児教育科 2) 鳥取市立美保保育園

(2006年11月7日受理)

3歳児A男・B子・C男の入園当初から一学期間の行動観察記録を中心に、子どもの人間関係の育ちと教師の関わりについて考察した結果、子どもの人間関係の育ちには、まず教師との信頼関係が重要なポイントと考えられる。そのことで、子どもの気持ちが安定し、子どもは他者を意識し始め、友だちと遊ぶことは楽しいという気持ちを味わい、自分から友だちと関わって遊ぶようになって考えられる。教師の関わりとしては、まず、教師は子ども一人ひとりのペースに合わせて1対1で子どもと一緒に園生活を過ごすことが重要なポイントであると考えられる。そして、子どもの気持ちを受けとめたり、友だちの仲立ちをしたり、友だちと関わっている様子を見守ったりしながら援助することが大切であると考えられる。さらに、どの子どもも集団の中でよい点が印象づけられるよう配慮することも必要であると思われる。

はじめに

核家族化・少子高齢化・情報化・都市化などの時代の変化にともない、人間関係は希薄になり、幼稚園においても他児と望ましい人間関係を築くことができない子どもたちが増える傾向にある。入園当初の子ども達の様子を見ると、保護者から離れて不安を感じる子ども、同年齢や異年齢の友だちとの関わりで自分の思いどおりにならず戸惑いを感じてトラブルを起こす子ども、どのようにして人と関わってよいのか分からない子どもなど様々である。

そこで、年少組(3歳児)の入園当初の子どもに視点をあてて、子どもの人間関係の育ちと教師の関わりについて考察する。

1. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

日々の保育の中で、友だちと関わっている子どもの様子を、教師が実践指導する中で観察した記録に基づいて、子どもの人間関係の育ちに教師はどのように関わればよいかについて考察する。

(2) 研究の方法

教師(担任)が子どもとともに生活する中で観察する自然観察法である。

- ①場所 鳥取市S幼稚園3歳児クラス
(男7名 女9名)
- ②対象 A男(8月生まれ)
B子(9月生まれ)
C男(8月生まれ)
- ③観察者 担任教師
- ④観察期間 平成17年4月～平成17年7月
- ⑤観察場面 一日の幼稚園生活の中で、担任教師が印象に残った場面
- ⑥記録整理の方法 週ごとに担任教師から出された記録に基づいて、S園の他の教師からの意見も考慮しながら、子どもの姿と教師の関わり

*連絡先：高月教恵 幼児教育科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

について整理する。さらに、それに基づいて高月も含め、検討する。

2. 結果と考察

(1) A男の場合

① 4月当初のA男

幼稚園入園前に、家庭の事情により一時保育を経験している。その頃は、周りを気にすることなく自分のやりたいことをしていつも1人で遊んでいたが、入園当初は、ほとんど何も話さず、何もせず、周りの様子を見てじっと座っている。教師に声をかけられると、目を合わせず「うん」と応える。このことから、周りの様子が気になり、戸惑いを感じているA男の様子が窺われる。

そこで、教師はA男に話しかけたり、遊びに誘ったりしながら、見守るように心がけている。

② 4月中旬から7月のA男の姿と教師のかかわり

A男の一学期の育ちを見ると(表1参照)、教師がA男なりのペースを大切にしていっしょに園生活をする中で、次第に園生活に慣れてきたと思われる。そして、自分の思いを教師や周りの子どもに表現することができるようになったが、自分の思いを通そうとする気持ちが強いために、言葉ではなくすぐに手が出てしまうようである。6月頃には、周りの子どもたちが、友だちを押ししたり、唾を吐いたりするA男に対して、「こわい」と思いはじめている様子が窺われる。そして、教師は、A男のこの行動が周りの子どもの怪我に繋がってはいけないと思い、A男に「よくないことだ」と言って度々注意している様子が窺われる。しかし、そのことで、A男はますます不安定になり、泣いて表現することが増えたように思われる。

そこで、教師がA男の行動を否定するのではなく、受けとめるようにしたことによって、A男は落ち着いて自分の行動を振り返り、どうしてそうしてしまったのかを教師に話すことができるようになってきたように思われる。そして、A男は自分の思いをゆっくりと教師に聞いてもらったことで、泣くことは少なくなり、少しずつではあるが、自分の思いを言葉で表現しようとする様子が窺われる。6月下旬には、周りの子どもたちも、変わ

ってきたA男を受け入れ始めていっしょに遊ぶようになり、そのことでますますA男の気持ちも安定してきたように思われる。そして、この頃から、A男は、自分からしようとしなかった挨拶を、自分から誰にでも、元気一杯にすることができるようになり、K男やT男と自分から遊ぶ様子が見られる。このことから、少しずつではあるが、自分の思いを言葉で表現することができ、友だちの思いを受け入れていっしょに遊ぶことができはじめたA男の育ちが窺われる。

教師の関わりとしては、担任がA男のペースを大切にしていっしょに園生活をする中で、A男は次第に園生活に慣れてきたと思われる。そして、自分の思いを通そうとして相手の友だちを叩いたり唾をかけたりするA男を注意することから、A男の思いを受け入れようとしたことによって、A男は自分の思いを振り返り、してはいけないことに気づき始めたと考えられる。

(2) B子の場合

① 4月当初のB子

入園して、始めて集団生活を経験する。入園前に幼稚園に来た時は、誰とも一言も話そうとしなかった。入園当初は、泣きながら登園し、教師の側から離れられず、教師といっしょに過ごす。教師が言葉をかけると、「うん」と応えるだけで自分からは話そうとしない。このことから、初めての園生活で、慣れない環境や慣れない人たちに戸惑いを感じて不安でたまらないB子の様子が窺われる。

そこで、教師は、B子が安心できる拠り所として信頼関係を築くということが大切だと思い、スキンシップをはかりながらB子に寄り添っていっしょに過ごすように心がけている。

② 4月中旬から7月のB子の姿と教師のかかわり

B子の一学期の育ちを見ると(表2参照)、教師がB子の不安な気持ちを受けとめてB子に寄り添っていっしょに過ごすことによって、B子にとって担任が安心できる存在になり、信頼関係が築けたように思われる。しかし、自分から友だちの遊びに参加せず、また担任以外の教師にも関わろうとせず、担任からなかなか離れられないようである。

表2 4月中旬から7月のB子の姿と教師の関わり

4月14日	今日も泣いて教師のそばから離れられないK男と、 <u>教師と一緒に滑り台をする。</u>
4月18日	泣きながら登園するが、教師の姿を見ると泣きやむ。 <u>まだ登園して来ないK男のことを気にして、「Kくん、きょうはないてくるかなあ」と教師に言う。教師は「Kくんが泣いて来たら、B子ちゃんが“おはよう”って言ってあげてね」と言う。泣いて登園するK男を見つけて、教師に「Kくん、な</u> <u>いてる」と知らせるが、教師から離れて自分からかかわることができない。</u>
4月21日	不安そうな表情をしているが、 <u>泣かずに登園する。教師は明るく「おはよう」と言って迎える。</u>
4月22日	泣いているM子を見つけて、「 <u>Mちゃんがないてるよ</u> 」と教師に言う。教師がM子を抱っこすると、 <u>K男と一緒にM子の頭をなでてあげる。</u>
4月25日	担任以外の教師に遊びに誘われるが、何も応えず、担任教師の側から離れられない。
4月26日	降園時、出席ノートを返してもらって、 <u>始めて「ありがとう」と言える。今まで自分で開ける</u> <u>ことができなかったロッカーも自分で開けることができる。教師は見守る。</u>
4月28日	お弁当をなかなか食べようとしない。 <u>教師は無理強いしないようにして、B子の食べる手</u> <u>助けをする。</u>
5月2日	K男とM子が遊ぶ様子を教師の側で見ている。K男とM子に誘われて、手を繋がれて教師から離れると泣く。 <u>教師が「先生も一緒に遊んでいい?」と言って仲間に入ると、泣き止む。</u>
5月6日	<u>同じバスコースの年長組R子と一緒に持ち物の片付けをする。教師は離れた所から見守る。</u> 弁当の時、教師はいつもB子の側で食べていたが、 <u>わざと離れた所に座り、「先生ここから見て</u> <u>るからね」と言う。教師をじっと見て食べようとしなかったが、まわりの友だちに励まされて食べ始める。</u>
5月10日	同じクラスのH子に誘われ、不安そうな表情だが、 <u>教師から離れて始めて園庭に行く。</u> 教師は温かく、「 <u>いってらっしゃい</u> 」と言って送り出す。
5月11日	<u>K男・M子を含む同じクラスの友だちとかけっこをする。教師は見守る。</u>
5月14日	参観日に父親と登園するが、自分からは何もしようとはせず、教師や父親が手伝ってくれるのを待っている。手遊び・歌などもやろうとしない。 <u>教師は無理強いせず、B子に声をかけなが</u> <u>ら一緒にする。</u>
5月18日	園庭で、 <u>同じクラスの友だち(K男・M子が含まれないのは始めて)</u> と、 <u>スケーターやトロ</u> <u>ッコに乗って遊ぶ。教師は見守る。</u> 体験学習で園にやって来た中学生に声をかけられると、表情が硬くなり、応えない。
5月19日	教師は、クラス子ども達全員を2列並びにして公園に散歩に行く。 <u>2列並びのB子の</u> <u>相手をわざとにK男にする。K男と喜んで手を繋いで散歩に行き、公園でK男と一緒に楽しそうに</u> <u>遊ぶ。</u>
5月20日	<u>教師から離れて、K男と一緒に園庭に遊びに行く。「せんせいをのぞきにいこうか」と言</u> <u>って、園庭と部屋を行ったり来たりしながら教師の様子を見に来る。教師は見に来ると温かく声をか</u> <u>けて、見守る。</u>

5月24日 教師は、縦割りでホールでお弁当を食べることにする。まったくお弁当を食べようとしな
いため、一人食べ遅れる。教師は部屋に持って帰って食べるように勧める。部屋にもどると、進んで
食べる。

5月27日 自分からK男を誘って、一緒に給食を食べる。

5月30日 年長児R子に誘われてしゃぼん玉をする。自分からはストローなどを持つとせず、R
子に渡してもらって一緒にする。

6月2日 教師は、縦割りで部屋で弁当を食べることにする。R子に誘われて、隣で弁当を食べる。

6月9日 園外保育でこどもの国に行く。K男に「いっしょにおべんとうをたべようね」と笑顔で声をか
け、K男の隣に弁当を用意するが、食べようとしな。教師はB子に声をかけながら見守る。

6月14日 今日から実習生がやって来て、B子にも声をかける。人見知りをして応えない。

6月16日 教師から離れず、手を繋ぎたがる。

6月17日 年長児達(R子を含む)に誘われて、手を繋いで一緒に遊びに行く。教師は見守る。

6月23日 教師の側で友達の遊びを見ている。クラスの友達に誘われても「あそばない」と応える。
教師は無理強いせずに見守る。

6月27日 ホールで全園児一緒に体操をする。戸惑って、体操をしようとしな。同年齢合同保育
になると、喜んで歌を歌う。2人組を作ることになると、自らK男の隣に行く。

6月29日 園庭に行かず、部屋にいるM子・S子と一緒に遊ぶ。

7月1日 老人福祉施設を訪問する。みんなと一緒に歌を歌うことはできるが、教師が手を繋いで
利用者との触れ合いをしようとするが、動こうとしな。教師は無理強いしなで見守る。

7月5日 園庭に出ようとしなB子がひとり部屋に残ったため、教師がA子に「Bちゃんもいっしょ
におそとにさそってあげたら？」と言うと、同じクラスのA子は「Bちゃん、いっしょにおそとにいこう」と
言う。教師と離れ、A子と一緒に園庭に遊びに行く。

7月6日 同じクラスのN男が「いっしょにうがいにいこう」と誘う。N男と手を繋いでうがいにいく。

7月11日 同じクラスの友達と一緒に園庭に遊びに行く。

7月13日 同じクラスの友達と一緒にホールに遊びに行く。大きな声を出して、笑いながら追いか
けっこをする。

7月14日 自分から教師に、「おそと、いってくる」と言って、ひとりで園庭に遊びに出る。教師は「い
ってらっしゃい」と言って送り出す。

〔注〕 _____ B子の育ち _____ 教師の関わり

本記録はB子の友だち関係の場面と教師の関わりについてポイントのみを整理して、記載
したものである。

そして、自分と同じように泣くK男やM子のこ
とが気になる様子が窺われる。5月頃より、K男や
M子を中心に、友だち関係が少しずつ広がり、同
じバスコースの年長児R子や同じクラスのH子に
誘われて一緒に遊ぶ姿が見られる。少しずつでは

あるが、担任から離れて行動する姿が見られるよ
うになり、K男に対しては、自分から誘って一緒
に給食を食べる姿も見られる。しかし、中学生が
体験学習で来ると、硬い表情になり声をかけられ
ても応えようとしな。6月に、実習生がやって

来ると、表情が硬くなる。担任と手を繋ぎたがり、友達に誘われても断って担任の側で友だちの遊ぶ様子を見て過ごしている。園外保育では弁当を食べようとしなかったり、ホールでの全園児一緒に体操に参加できない様子から、相変わらず新しい環境や人に馴染めないB子の様子が窺われる。しかし、6月下旬から7月初めにかけて、同年齢合同保育や福祉施設訪問では、友だちと一緒に歌を歌うことができはじめたことから、少しずつではあるが新しい環境にも慣れてきた様子が窺われる。7月では、同じクラスのA子に誘われて一緒に遊んだり、自分から同じクラスのN男に「いっしょにうがいをしよう」と誘って一緒にうがいをする姿が見られるようになる。そして、中旬には「おそとにいつてくる」と担任に言って、ひとりで園庭に遊びに行くことができるようになったB子の育ちが窺われる。

教師の関わりとしては、担任がB子の不安な気持ちを受けとめてB子に寄り添って一緒に過ごすことによって、B子との信頼関係を築いている。そして、B子の様子を見つめながら、手を差し伸べて寄り添ったり、少し離れた場所から友だちと関わるB子を見守りながら、B子が自分なりのペースで安心して様々な人と関わるようになるように援助したことによって、B子は自分から少しずつ友だちとかかわったり、自分から一人で行動できるようになってきたと思われる。

(3) C男の場合

① 4月当初のC男

入園して、初めての集団生活であるが、入園当初から元気に登園する。保護者の話によると、一人っ子であるが近所に同年齢の子どもが多いこともあり、一緒に遊ぶ機会は多かったとのことである。C男は、元気よくどこでも走り回り、近くにいる子どもにぶつかっていたり、体の上に乗ったりする。教師や周りの子ども話を聞こうとしない。そして、周りに友だちがいても、関わることなくほとんど一人で遊んでいる。このことから、C男は周りに友だちがいることには慣れているが、友だちとの関わり方がわからないのではないかと思われる。

そこで、教師は、C男の行動を否定するのではなく、そのことによって周りの子どもがどういう気持ちになるのかを伝えていくようにして、少しずつC男が友だちを意識していくことが出来るように働きかけている。

② 4月中旬から7月の男の姿と教師の関わり

C男の一学期の育ちを見ると(表3参照)、入園当初は自分勝手な行動が目立ち、周りの友だちとのトラブルになることが多く、教師が注意すると顔を背けるC男であるが、教師が周りの友だちとの仲立ちとなってC男と1対1で接しながら友だちの気持ちを伝えることによって、5月頃より、教師の言うことを素直に聞いて、友だちに謝る姿が見られ始める。また、困っている友だちの靴を探してやって、友だちに「ありがとう」と言われる。また、自分の木の枝を取ろうとして教師に叱られたD男の木の枝を教師と一緒に探してやるなど、少しずつではあるが友だちを思いやる姿も見られる。自分一人のジュース屋さんごっこに、友だちが加わってくると一緒に遊ぶ姿も見られる。そして、6月では、教師に全員の友だちのことを聞いていることから、周りの友だちの存在を認識し、気になり始めた様子が窺われる。しかし、友だちを叩いているA男を見つけると走って行って叩いたり、友だちと手を繋ぐときに強く握りしめて泣かせたり、友だちの積木遊びをしたいと思うと壊して取ろうとしたりするなど、まだまだ関わり方がわからないC男の様子が窺われる。しかし、教師に相手の友だちの気持ちを伝えられたり注意されることによって、謝ったり、「いれて」と言って遊びに加わることができてきている様子も窺われる。しかし、7月になって、病欠欠席後の登園の日は、大喜びで部屋中を走りまわって、友だちにぶつかり、謝っている様子から、言葉よりも体で友だちと関わろうとする傾向がまだまだ強い様子が窺われる。

教師の関わりとしては、C男と1対1で接しながら、周りの友だちとの仲立ちとなって接しながら友だちの気持ちを伝えている。そして、C男が友だちに対して優しく接したり思いやりの気持ちが見られたりする時は、認めて見守っている。このことによって、C男は友だちを意識しはじめ、

表3 4月中旬から7月のC男の姿と教師の関わり

4月13日 クラス全体への絵本の読み聞かせで、最初は座って見ているが、一番前に立って見る。子ども達が口々に「みえん」と言う。教師が「みんながみえるように、Cくんにもすわってほしな」と声をかけるが、C男は立ったままである。読み聞かせが終わったとたん、部屋から飛び出す。

4月14日 同じクラスのM男とおもちゃの取り合いになり、髪をひっぱり体の上に乗ったりする。教師が仲立ちとなりお互いの話を聞こうとするが、C男は顔をそむける。

4月20日 突然、部屋から飛び出す。部屋に戻ると、部屋の中を走り回り、周りの友だちにわざとぶつかったり体の上に乗ったりする。ぶつかられた友だちが泣くとびつくりする。教師がC男に「お友だちはびつくりするし、痛くて泣いているよ。ごめんなさいって謝ろうか」と言う。泣いている子に謝る。

4月25日 自由遊びの時、小さなバケツを頭にかぶり、面白がって部屋を走り回る。教師はC男を抱きしめながら危険であることを教える。弁当の時、「いっぱい食べたら大きくなれるんだ」と言い、なかなか食べられない友だちに「ぼくはもうちょっと」と言う。大きくなれるということに喜びを感じているC男を教師は見守る。

5月6日 友だちが積木で作った家を次々に壊していく。壊された友だちが「やめて」と言うが聞かないので、教師に訴える。教師がC男に「自分が作ったものを壊されたら悲しいね。ごめんって、謝ろうね」と言うと、素直に「ごめんね」と謝る。

5月10日 靴を探している友だちの靴を探してあげ、見つける。友だちに「ありがとう」と言われる。

5月11日 クラスの友だちがいないことに気づき、「〇〇ちゃんはどこにいる？」と教師に聞く。

5月19日 園外保育で公園に散歩に行き、落ちていた木の枝を見つめる。D男に取られそうになり、ひっぱり合いになる。教師がD男に「これはCくんのだから、違う枝を探そう」と言う。一緒に探してあげ、いろいろな枝を見つけては、D男のところに持って行く。

5月20日 砂場でひとりジュース屋さんごっこをする。ペットボトルに水を汲んできて遊びに参加してきたH男と一緒に遊ぶ。教師は見守る。

5月23日 友だちを叩いて注意されている子どもに、「やっつけてやる」と戦いのポーズをとる。教師はC男に「お口で教えてあげてね」と言う。

5月24日 2列並びで散歩に出かける。ペアの子と手を繋ぎたがらないで、教師と繋ぎたがる。無理強いせず、様子を見ながら手を繋ぐよう働きかける。

5月26日 2列並びで教師と手を繋ごうとするが、教師がペアの友だちの名前を伝えると、名前を呼びながら探し、手を繋ぐ。

6月2日 他の部屋で遊んでいる同じクラスの友だちのことが気になり、教師に「〇〇ちゃんはどこにいるの？」とほぼクラス全員のことを聞く。教師はC男の問いかけにきちんと応える。

6月9日 園外保育に2列で出かける。ペアのS子の手を強く握ったため、痛くて、S子が泣いても離そうとしない。教師が「そっと繋いであげて」と言うと、「だって、Sちゃんがはなそうとするんだもん」と言う。

6月16日 遊んでいて思いどおりにならず相手をたたいているA男のところへ走って行き、A男を押す。A男が泣く。教師が「たたいたり、押ししたりしないでお口で言おう」と二人に注意する。C男は

A男に謝り、A男は叩いた友だちに謝る。

6月23日 友だちが作っていた積木を壊す。友だちに「やめて」と言われる。教師に「どうしてこわすの？」と尋ねられ、「だって、Cもしたいもん」と応える。教師は一緒に使いたい時はどうしたらよいか話す。積木をもとどおりにしようとし、「いれて」と言う。仲間に入れてもらって、一緒に遊ぶ。

7月11日 風邪で休んで、一週間ぶりに登園する。大喜びで部屋中を走りまわる。友だちにぶつかって行き、すぐに「ごめんね」と謝る。友だちに「いいよ」と言われる。教師は見守る。

[注] _____ C男の育ち _____ 教師の関わり

本記録はC男の友だち関係の場面と教師の関わりについてポイントのみを整理して、記載したものである。

少しずつではあるが、友だちを思いやり、自分の思いを体ではなく言葉で表現しようとする様子が見られるようになってきていると考えられる。

(4) まとめ

入園当初の3歳児クラスの子どもたちの様子は、A男のように初めての集団生活に戸惑いを感じて何もせずにじっと座っているが、慣れるにしたがって自分の思いを通そうとして手が出る子ども、B子のように保護者と泣きながら離れて不安で教師から離れられない子ども、C男のように関わり方がわからず友だちとのトラブルの多い子ども、そして、好奇心が強く動き回る子どもや、友だちと関わることなく一人で遊ぶ子どもなどが、ほとんどである。

教師の関わりとしては、A男の場合、教師はA男のペースを大切にしながら一緒に園生活を過ごしながら、A男が自分の思いを言葉で表現するよう援助している。B子の場合、教師はB子の不安な気持ちに寄り添いながら過ごして安心感をもたせるように心がけ、A子が友だちと関わるができるよう見守ったり、援助したりしている。C男の場合、教師はC男の行動を見守りながら1対1で関わって友だちの存在や気持ちを知らせていっている。

このようにして、教師は各々の子どもの個性を大切にしながら1対1で関わり、一緒に過ごすことによって、子どもとの信頼関係を築いている。子どもにとって教師の存在が安心できる存在とな

るに従って、各々の子どもは少しずつ落ち着き、安定して園生活を過ごすことができるようになってきたと考えられる。そして、他者を意識するようになり、友だちと一緒に遊んだり、泣いている友だちの頭をなでたり、涙を拭いてあげたりという思いやりの姿も見られるようになってきている。しかし、反面、自己中心的な行動が多く見られ、自分の思いを通そうとして、友だちを押ししたり、唾をかけたり、叩いたりといった行動も見られる。また、友だちとの関わり方がわからず、ほしいものは力づくで取ったり、わざと友だちにぶつかったりするなどの行動が見られ、友だちとのトラブルが多く見られる。そこで、教師は子どもたちの仲立ちとなって、友だちの気持ちを伝えたり、自分の思いを言葉で表現するように援助したり、「いれて」「かして」「ありがとう」「ごめんなさい」などの言葉を教えたり、認めたり、見守ったりしている。特に、教師が子どもに注意するときには、子どもの行動を否定するのではなく、その子どもを受け入れて、その子どもが自分の行動を振り返る機会をもつことが重要であると思われる。そして、子どもたちは教師の一人ひとりの子どもへの接し方をじっと見つめているということを配慮して、教師は自分自身の振る舞いに十分気をつけることも大切であると思われる。

これらのことによって、子どもたちは友だちと一緒に遊ぶことは楽しいという気持ちを少しずつ味わうことが出来るようになり、自分から友だちと遊ぼうとする育ちの姿が見られるようになった

と考えられる。

おわりに

入園当初の3歳児は、慣れない初めての集団生活に不安があるが、気持ちが安定したことにより他者を意識し始める。そして、友だちと一緒に遊んだり、友だちの思いに共感したり、思いやりをもつ姿も見られるようになる。また、友だちと関わる機会が増えるに従って友だちとのトラブルも多くなる。しかし、友だちとのトラブルを通して子どもたちの人間関係は育っていくと考えられる。

大場牧夫が「3歳児は大人との結びつきから子どもどうしの結びつきへの集団化のスタートの時期である」と言っているように、教師の関わりとしては、子どもが安心できる1対1の信頼関係を築くことが、まず不可欠であると言えよう。そして、教師は、他者との関係を意識しはじめた3歳児の人間関係をよく見つけ、仲立ちをしたり、時には自然な姿を見守ったりということが重要なポイントになるのではないかと考えられる。また、子どもに注意をするときには、周りの子どもたちがそのことを見つめているということを意識して、「こわい子」「わるい子」「できない子」「できる子」の印象づけをしないように、どの子どももよい点が集団の中で印象づけられるよう配慮する

ことも必要であると思われる。

先の研究で、子どもの主体性の育ちと家庭との連携²⁾や子どもの人間関係の育ちと園内研修のあり方³⁾について研究し、その重要性について考察した。本研究では、入園当初の3歳児の人間関係と家庭との連携および園内研修のあり方について考察をすることはできなかった。今後の課題としたい。

本研究は、平成17年度鳥取県私立幼稚園教育研修大会で発表したものを、加筆修正したものである。本稿の観察記録については、人権保護法の立場から匿名で記し、掲載にあたっては、研究対象園の同意を得たものである。ご協力いただきました先生方に謝意を表します。

引用文献

- 1) 大場牧夫・大場幸男・民秋言著「子どもの人間関係」 萌文書林 pp.154-155
- 2) 高月教恵「子どもの主体性と教師のかかわり(4)-園と家庭との個人的なかかわりを中心に-」新見公立短期大学第22巻 pp.17-26
- 3) 高月教恵「子どもの人間関係の育ちと教師の役割-園内研修を通して-」日本保育学会第59回大会発表論文集 pp.594-595

A Study on the Growth of Children's Interpersonal Relationship and the Teacher's Support

- Mainly on Three-year-olds just after Entrance into a Kindergarten -

Norie TAKATSUKI, Tomoko MATSUOKA

Department of Early Childhood Education, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

Growth of 3 three-year-old children's (Boy A, Girl B and Boy C) interpersonal relationship and teacher's intervention are considered mainly through the action observation record during the first term just after the entrance into a kindergarten. The mutual trust with their teacher is thought to be important first of all. If they have mutual trust with their teacher, their feelings are steady, then they begin to consider others, and enjoy playing with their friends voluntarily. Regarding teacher's intervention, it is thought essential that the teacher shares some time with each child at his or her pace. It is also important for the teacher to accept children's feelings, help them mingle, and watch them play with their friends. In addition, it seems necessary that teachers see to it that each child's good point is impressed in the children's group.